

座間事件の深層(その 1) 被害者の心理と悪魔の誘い

榎場 雅子

(臨床心理士・精神保健福祉士)

神奈川県座間市のアパートの一室で、15 歳～26 歳の 9 人（男 1 人、女 8 人）の遺体が発見され、元風俗スカウトマンの白石隆浩が死体遺棄容疑で逮捕されたのは、昨年 10 月 31 日のことでした。テレビも新聞も連日その続報を報じ、実は前代未聞の猟奇的殺人事件であることが判明しました。犯罪事件には全く素人の私共の相談室にも、市民の声として、意見を求める声が相次ぎました。

最初の相談は事件から 9 日目、高校 2 年生の娘を持つ母親から、我が子と被害者の身を重ねて、一番若い子は、高校 1 年生と言うではありませんか。有名女子大学の学生もいるとのことですね。うちの娘は年齢的には、真ん中の高校 2 年です。来春には受験というのに、何の屈託もないように、毎日を過ごしています。こんな娘の心の奥底には、自殺を考えたときがあるのかと思ったときに、冷水を浴びせられた思いがしました。折も折、手に入れたのが「新しいふれあい社会」11 月号で、図らずも“青少年の自殺を考える”特集号でした。それは事件が発生する前に、編集されたことは容易に考えられました。そこには、「子どもは自分が愛されている」と思えば、自殺しません、とはっきり言いきっているのを読んで、救われた思いがしました、と述べ、そのうえで執筆者と生の声で話したくて電話をしました、と言うことでした。

これを受けて、相談員の立場から始めてこの事件に触れ、容疑者は、なぜ人に知られないままに、これほど多くの若者を惹きつけたのか、逆に言えば被害者は、なぜ安易に容疑者のところへ行ってしまったのか、そこにある青年期特有の心理状態を見逃すことはできません。この期には、「自分の生き方を見出す」という課題が与えられています。課題達成を試みるなかで、挫折にも出会い、成長します。そのなかで、「生」と「死」について考えるのも当然のことです。人の心の中には、生きたいという願望（エロス）と死んでしまいたいという願望（タナトス）の両方があります。生活が生き生きとしていて、生きるための目標があるときは、タナトスは心の奥底に、ひっそりとしていて意識されることはありません。ところが青年期は、怒りや悲しみ、ストレスや苦痛などの負の感情が敏感になっていると、脳科学的に立証されています。そのため苦痛や孤独を感じやすく、タナトスを呼び起こしやすくなっているのが特徴ともなっています。

しかし「死にたい」という思いがよぎることは、そのまま「死」に真向かうことではありません。「死にたいよ」とのつぶやきは、「死にたくなるほど辛いよ」と言い換えて対応してください、と記したのも、このことを考えてのことでした。そこには、「誰かに自分の気持ちを聞いて欲しい」「誰かに自分の辛さをわかって欲しい」と言う痛切な思いが隠されているのではないのでしょうか。その心理に巧みにつけ込んだのが、白石隆浩容疑者の悪魔のころだったのではないのでしょうか。ネットの世界が若者にとってリアルになりつつある今日、身近にいる大人として若者の心理状態に思いを致し、このような被害者が二度と出ないことを切に願い、見守りましょう、と伝えました。

(独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業)

ところが、この問題をこれで終わりにすることは、世間が許してくれなかったのです。警視庁の捜査で、9人の被害者の身元が明らかになって、11月11日付の全国紙朝刊は各紙一斉に実名、年齢に加えて、エピソードまでを交えて報じていました。それを読んで、犯行の残酷さに、白石容疑者に対する怒りがいやが上にも募るのを禁じ得ませんでした。それと同時に、マスコミが被害者の実名や年齢、エピソードまで報じることへの疑念はぬぐい切れないものがありました。

果せるかな、テレビのインタビューで、被害者の一人とみなされる高校生の家族と親しいという男性は「本当に可愛いがられていた。車が大好きだった」と言い、「乗用車のナンバーも娘の名前に語呂合わせて決めていたほどだった。今はそっとしておいてあげてください」と答えていました。娘とは事情があって離れて住んでいたという父親は、「娘が事件に巻き込まれたとは信じたくない」と素っ気なく答え、その場をそそくさと立ち去ってしまいました。胸を締め付けられる思いでした。巷での無差別のインタビューでも、「被害者のプライバシーはしっかり守ってあげるべきだと思う」「被害者家族の心の痛みを思えば、この上傷口に塩を塗るような行為は慎むべきと思います」など、いかにも尤もらしい意見が多い中で、中年の女性が毅然として「被害者にも家族にも気の毒だが、この事件の被害者は、誘拐や通り魔のように、一方的に受けた被害とは違うと思う。ツイッターで知り合った〈死の案内人〉のところへ、〈悩める自殺願望者〉として自分で出向いている。秘密性の高いSNSの中で、どんなやり取りが交わされたのか、彼女たちはどうしてやすやすと、容疑者の罠にはまってしまったのか、今後のためにも、このことを伝えるのはマスコミの義務ではないか」と言っていました。一瞬、息が止まるほどの感動を覚えました。相談員などと、自負していながら、ここまで毅然といえない自分を反省し、「その際には被害者の名誉、その遺族への心ない風評被害、サポートは忘れないことですね」と独りで付け加えて、自分を納得させました。

それから5日後、元高校教師で現在は地域子供ボランティアの世話人をしていると自己紹介するW氏から、事件に対する意見を求める電話がありました。怒りをあからさまにして、強い口調で、この事件は、犯罪史上も稀に見る猟奇事件と言うより、殺人そのものに異常な興奮を覚えるという快樂殺人ではないか。それとも全く新しい人間像なのか、と辛らつな意見を早口に述べ立てた上で、なお、被害者は10代の未成年4人を含む若者ばかりだった。その身元を、大新聞が一斉に実名で報じていることにも疑問がある。被害者は勿論のこと、家族の心情を思い遣るべきではないか、としんみりと付け加えました。それは私の胸のうちを凝縮したような思いでした。同時に、多くの市中の皆さんも共感するところではないでしょうか。

しかし問題は余りにも重く、私ごときが容易に答えられないとまどいに似たものがありました。そこには、数日前に高校生の我が子と被害者を重ねて話し合った、日頃の母親との心のふれあい、テレビの取材に応じた、一般市民の偽りのない答えの重さが、私の脳裏を離れなかったからです。私は、このことを感想を交え正直に伝え、市中にある身として、このような悲惨な事件の被害者を二度と出さないためにも、ここは被害者のありのままの姿を真正面から受け止めて、どんな人が、どうして不条理にも命を奪われてしまったのか、**その事実を実感として、受け止め共有することが**、社会的にも意味があり、辛いことですが大人としての務めではないでしょうか、と伝えました。

「なるほどねえ…、容疑者の異常な人格、狡猾な手口ばかりを考えている場合ではないですね。被害者の実態を知り、事実を実感として受け止め共感するのが、辛いことだが大人としての務めとまで言われると、反論の余地がありません。もう一度調べ直します」と言ってくれました。

2週間後、W氏から再度の電話がありました。「あれから能う限り事件の情報を収集しました。聞いてください。そして考えてください。先日の言葉をそのままお返しすると、事実を実感として受け止め、共有することが、社会的にも意味があり、大人としての務めだと思います」と、一気に熱意を込めて迫られました。返す言葉もなく、その情報を傾聴しました。

事件発覚の端緒となり、9人目の最後の被害者・田村愛子さん（23歳）は、10月23日に「死ぬ決心がついた」との連絡を白石宛に入れたまま、消息を絶っていました。兄の話によると、幼い頃父親の家庭内暴力から逃れて、兄とともに母親に伴なわれて横浜市から山梨県甲州市へ転居して、穏やかな地域で学童期は事なく伸び伸びと過ごしました。中学1年のとき八王子市に転居したが、学校でのトラブルをきっかけに（詳細不明）、家に籠もるようになり、23歳を迎えていました。

この間のことを、兄は「妹は家族以外の人と会うことを極端に怖がっていました。彼女にとって家の中が世界のすべてのようなものだったと思います」とツイッターに投稿しています。6月に母親が他界し、事件当時、本人は医療法人が運営する市内のグループホームに入居していました。

事件発覚のきっかけは、兄がツイッターで妹の失踪に関する情報提供を呼びかけていたところ、ある女性が、「妹さんと交流していた人物と同じハンドルネームの人がいる」と申し出たのでした。兄からの検索願を受理した高尾署は、その女性に協力を求めて、女性がツイッターで白石容疑者を神奈川県内の、ある駅におびき出しました。彼は駅までやってきましたが、女性が現れないので、諦めて帰るところを捜査員2人が尾行し、現場のアパートを割り出したと言います。

最初の被害者と見做されている会社員のA子さんは、厚木市で母と兄の3人で暮らしていたが、8月21日に「やり直したい。失踪します」と簡単な書き置きを残して姿を消してしまいました。白石の供述によれば、A子さんを探しにきたバンドマンの西中匠吾さんも、自殺願望の持ち主で、この事件のただ一人の男性被害者になっています。彼を知る高校時代からの友人は、「最後に彼と会ったのは8月24日で、心なしか元気がなく“退院したばかりで…”と言っていた」と言います。「女に振られて落ち込んでいた」と話すミュージシャン仲間もいました。さらに注目されるのは、白石容疑者はA子さんから50万円を奪ったと供述していることです。最初に大金を得たことで、仕事で稼ぐより自殺志願者から金を奪うほうが早いとの身勝手な考えが芽生えたのではないかとみる向きもあるようです。

被害者の中で最年少のB子さんは、15歳の高校1年生。彼女の足取りが消えたのは、夏休みも終わりに近い8月28日の夜のことでした。高校の同級生は、「穏やかで可愛らしいタイプでした。一学期は普通に話していたのですが、夏休み中にLINEしたときには返事がなくて…。友だちの噂では、両親の仲が悪くて、よく家出をしていたそうです。だから今回もそうなのかな、などと、話していたのですが…」と遠慮がちに話してくれました。別の中学時代の友達「ホラーゲームやホラー小説が好きで〈殺戮の天使〉と言うホラーゲームをよくやっていました」と話してくれました。

ジャーナリストの江川紹子氏は、「こんな可愛い子が、いろんな悩みもあったかもしれないが、これから楽しいこともあったろうに…。胸が痛みました。けれどいつどこで誰が何をしたかという要素をしっかり伝えるのが、報道の基本です」と述べています。これこそ、事実を実感を伴って共有することの基本になるものだ、と思いました、とW氏は熱っぽく語りました。

W氏の話はなおも続きました。さいたま市に住む高校2年生のC子さん(17歳)は、三次元のイケメン俳優より、深夜アニメのキャラが好きなタイプでした。9月30日の午前中、「お昼を買いに行ってくる」と言って家を出たまま帰ってきませんでした(それ以上の詳細不明)。

もう一人の高校生、福島市に住むD子さん(17歳)は、両親が昨年4月に離婚、母親と二人の生活でした。東京に憧れていて、一昨年の暮れから翌年初にかけ家出していました。今度は9月の末頃から行方が分からなくなり、母親から元夫である父親の許に連絡が入っていました。11月の初旬、DNA鑑定の資料提供の依頼に訪れた捜査員に、「娘が事件に巻き込まれたと思いたくない。もしそうだと判ったら僕は犯人を生かしてはおかない」と怒りを露わにしていたと言います。

もう一人の犠牲者、所沢市に住むE子さん(19歳)は、都内の名門女子大学の2年生で、理科や化学が得意な「リケジョ」タイプでした。9月15日に突如、誰にも告げず姿を消していました。

被害者の中には、風俗店に勤務していた女性もいました。春日部市に住むF子さん(26歳)は、心の病を抱えていて、夫とは離婚したばかりの身で、埼玉県内の風俗店に勤務したのは8月末から2週間ほどでした。「笑顔が全くなく、水商売や風俗店などで勤まるとは思えないタイプでした」と店の関係者は明かしています。最後の出勤は9月中旬、その後は連絡が取れなくなっていました。

最後になってしまいました。横浜市のG子さん(25歳)は、高校を卒業してから約7年の間、ひきこもっていました。母親の励ましで(父親不在?)、一念発起して昨年4月からコンビニでアルバイトを始めました。約10カ月を経た10月18日の夕方、アルバイト先を出てから、誰にも告げずに失踪してしまいました。母親によれば、おとなしい性格で人付き合いも苦手、アルバイト先での接客にも悩んでいたようです。自室でLINEか何かSNSをやっていたのは知っているのですが…、と言い、翌日捜索願を出しています。

こうしてまとめてみると、「事実を現実のものとして実感する」重さに責められる思いがします。9人の被害者に共通するのは、自殺願望→失踪→その行く先は、救いの手として信じていた人で、実は殺人モンスターだったというのが、冷厳な事実であり現実です。このことを遡って考えると、青年期の危機・同一性拡散⇔機能不全家族⇔抑うつ状態→希死念慮→自殺願望という道筋が見えてきます。有識者は挙って地域の自殺対策協議会や自殺防止コールセンターの拡充を説いています。国立精神医療センターの医師は、「〈死にたい〉と言える人間関係が大切です。人との繋がりが自殺を防ぎます」とコメントしていました(11月11日毎日朝刊)。ネットに詳しい識者は、「家族にも友人にも言えない本音や願望を聞いてくれるネットの相手は貴重な存在で、SNSのやりとりは、会って話すと同じぐらいの内面の交流が成立します」とコメントしていました。

いずれも十分に納得できました。けれど…、いえ、だからこそ、声を大にして言いたいのです。「あなたも私もゲートキーパーです!」と。そして、「We are not alone!」と。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時

相談担当 榎場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報厳正に取り扱います。

〈社会的孤立の防止〉◆日本中を震撼させた座間事件に対する疑問や反省は少なくない。第1に国・県・市の立派な公的相談機関がなぜ利用されなかったのか。第2に当相談室には家族から多くの悩みや相談が寄せられるが、本人の悩みを直接聞くことはごく稀である。第3にもし相談室が被害者と接していれば、何人かの若者の命を救えたのではないか。◆26年1月に障害者権利条約が批准され、成年後見制度の抜本的な改善と利用の促進が求められている。「親亡きあと」の障害者や2025年に720万人に達する認知症高齢者の「後見爆発」にどう対応するのか、いったい誰がその権利を擁護し生活を支えるのか。「市民が市民を支える社会」を実現するしかない(h)。